

# 「観念」と「肉体」

## —坂口安吾「白痴」の執筆背景—

中 畑 邦 夫

### 1 はじめに

坂口安吾は、小説、エッセイといったジャンルを問わず、自らの作品において、「観念」というものに対して、執筆活動を開始した当初から批判的であった。それは、安吾によれば、「観念」というものが、「肉慾」（「枯淡の風格を排す」）、「ふるさと」（「文学のふるさと」）、「必要」あるいは「実質」（「日本文化私観」）、「肉体」（「デカダン文学論」）等々、我々の「生」の根本を成すものを見失わせる、あるいは見あやまらせるからであった、とすることが出来よう。

だが、終戦直後に書かれ、安吾の名を一躍有名にした「墮落論」および「白痴」の中の次のような箇所を読むと、戦前の安吾の思想に、戦争をきっかけとして何らかの変化があったのではないかとも思われる。

私は戦きながら、然し、惚れ惚れとその美しさに見とれていたのだ。  
私は考える必要がなかった。そこには美しいものがあるばかりで、

人間がなかつたからだ。(中略)戦争中の日本は嘘のような理想郷で、ただ虚しい美しさが咲きあふれていた。それは人間の真実の美しさではない。そしてもし我々が考えることを忘れるなら、これほど気楽なそして壮観な見世物はないだろう。たとえ爆弾の絶えざる恐怖があるにしても、考えることがない限り、人は常に気楽であり、ただ惚れ惚れと見とれていれば良かったのだ。私は一人の馬鹿であった。最も無邪気に戦争と遊び戯れていた。

（「墮落論」 228 傍点論者）

ああ人間には理智がある。如何なる時にも尚いくらかの抑制や抵抗は影をとどめているものだ。その影ほどの理智も抑制も抵抗もないということが、これほどあさましいものだとはい！ 女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りついていた。苦悶は動き苦悶はもがき、そして苦悶が一滴の涙を落している。もし犬の眼が涙を流すなら犬が笑うと同様に醜怪きわまるものであろう。影すらも理智のない涙とは、これほど醜悪なものだとい！

（「白痴」 79 傍点論者）

ここに挙げた文章の中では、「考えること」、「理智」、つまり「観念」こそが人間をして「人間らしく」するものであると論じられているのであり、そういった意味では、安吾はそれまで主張してきた観念批判を修正、あるいは変更しているとも考えられるのである。

このような事態を、「安吾の思想は戦争を境にして断絶しているのか、それとも連続しているのか?」といった問題としてとらえることが出来よう。ここで結論を先取りする形で言えば、それはどちらとも言えない、あるいは、どちらかだと断定することに大した意味はない、ということになる。さらに言えば、安吾の思想にそもそも内在していたものが、戦後、「新たな相」において現れたのである。

この問題については、花田俊典氏が、「白痴」を論じることを通じて大変示唆に富む二篇の論文を書いている。本稿は花田氏の論考を手掛かりとして、戦後、安吾の諸作品に現れた「新たな相」について考えることを目的とするものである。

花田氏の論考を検討する前に、便宜上、本稿の観点から「白痴」のストーリーをごく簡潔にまとめておこう。自らの「観念」の危うさにおびえる主人公・伊沢は、「観念」というものを全く抱かず、ただ己の肉欲に忠実な白痴の女と出会い、行動を共にすることを通じて、自らの「観念」が徹底的に破壊されることを経験する。しかし、自らの「観念」が徹底的に破壊されてなお、伊沢は新たに観念を構築しようとするをやめない、あるいはやめることが出来ないのであり、そのような破壊と構築のプロセスが、伊沢が、さらには人間が「人間らしく」生きてゆく限り、終わることなく繰り返されて行くものである、ということが示唆されるのである。

## 2 「連続」の相

花田俊典氏は、『『白痴』の位置—戦後安吾文学の出発—』（以下、「位置」と略記）および『『白痴』評釈』（以下、「評釈」と略記）において、「白痴」を解釈しつつ、安吾の「断絶と連続」の問題について論じている。ただ、ここで一言しておけば、花田氏は必ずしも、「白痴」に積極的に「断絶」を見出そうとしているわけではない。にもかかわらず、花田氏の論考において、「断絶」が指摘されていると解釈せざるを得ないのではないかと、論者は考えるのである。

さて、花田氏は一方で、「白痴」を「文学のふるさと」における安吾の思想が具体的に描かれたものとして解釈することにより、「連続」の相を指摘している。花田氏は、安吾の考える「知識人の誠実な在り方」といったものが端的に描かれたものとして、「文学のふるさと」の次の一節を挙げている。

とにかく一つの話があって、芥川の想像もできないような、事実でもあり、大地に根の下りた生活でもあった。芥川はその根の下りた生活に、突き放されたのでしょうか。いわば、彼自身の生活が、根が下りていないためであったかも知れません。けれども、彼の生活に根が下りていないにしても、根の下りた生活に突き放されたという事実自体は立派に根の下りた生活であります。

つまり、農民作家が突き放したのではなく、突き放されたという事柄のうちに芥川のすぐれた生活があったのであります。(96)

この一節を、花田氏は次のように敷衍している。

ものとしての現実をまえに、この現代を生きる知識人は誰しも「知性の無力」(井上良雄)を思い知らされる。といて、「あくまで知性にたよるほか」(昭11・6・17 矢田津世子宛書簡)に残された手だてがないとするならば、あえて敗北を辞せず、鋭くとぎすまされた知性をもって誠実に「突き放される」という、不断の精神の運動こそが「すぐれた生活」となりえるということだ<sup>1</sup>。

「白痴」の主人公である伊沢は、まさにこの「突き放される生活」の体現者にほかならず、「白痴」とは、ひとりの知識人の誠実な敗北と誕生への物語であると、花田氏は解釈するのである<sup>2</sup>。

「白痴」の冒頭、伊沢の住む場末の町、そして伊沢の勤める会社が、一見すると正反対の性格をもった場所であるかのように描かれているが、この「二つの対蹠的な場所 トポス」は、ついに伊沢においては究極的には同じ意味あいしか持たない、すなわち、『徒党を組み』、『架空の文章に憂身をやつし』ているいわゆる世にいう文化人たちも、「もし必要とあらば偽の診断書さえつくって平然と事態收拾にこれつとめるしたたかな場

末の庶民」も、同じように「生活なるものの意識」に忠実であるだけなのである<sup>3</sup>。

より生きやすく生きてゆくために、人びとは徒党を組み、ことばをもてあそび、無言のうちに許し合う。「人間は可憐であり脆弱であ」（「墮落論」）るから、世間に生きるに好都合な生活の知恵は誰しも宿命的に持ちあわせざるをえない。過剰な観念と氾濫することばの世界に生きる文化人も、また一見それとは反対のいわゆる肉体の領域に住むかに見える場末の庶民も、しょせんひとしく安逸な生活優先型の〈衆愚〉にすぎないのであった<sup>4</sup>。

つまり伊沢は、「突き放される」ことを拒む、それどころか、そんなことは念頭に浮かぶことさえない人々に囲まれて生活しているのである。「芸術の独創を信じ、個性の独自性を諦めることができない」<sup>5</sup>（64）伊沢は、さしあたり、その本質において芸術とは無縁な会社勤めの中で、自らの観念を脅かされている。そこに「白痴の女が登場してくることとなる」<sup>6</sup>。

「言葉の意味もこの女には理解する能力すらもない」、「二百円の悪霊すらも、この魂には宿ることができない」。じつに彼女こそ、ことばも生活も剥奪された〈肉体〉そのもの、いうなれば〈精神〉の象徴たる伊沢が真に対峙するに足りる存在であった<sup>7</sup>。

花田氏は一方で、「白痴」を、伊沢が白痴の女と「誠実に対峙」し、その観念が「二転三転」させられる物語として解釈する<sup>8</sup>。「彼女をいわば異形の者とよぶなら、その不可知な異形の者を意味づけ、理解し、みずからの秩序のなかに組み込まんとして、伊沢は懸命に格闘する」<sup>9</sup>。つまり伊沢は、なんとかして白痴の女を自らの観念の中にとらえようとするのだが、そのたびに突き放されるのである。だが、これは後に「断絶」の相を検討する

際にも言及されることになるが、伊沢が「突き放される」プロセスは、伊沢にとって平和的に受け入れられるものでは、決してない。時に伊沢は、「突き放される」ことに耐えられず、白痴の女の死という形で、そこからの逃避を願うことさえある。

彼は例によって、これ以上もの向きあうことを避け、「突き放され」た自己を急ぎ立て直さんとして、白痴の女を「土から作られた人形」、もしくは「元々魂のない肉体」と見なす。そして「俺は卑劣で、低俗な男だ」などとうそぶきながら、「戦争がたぶん女を殺す」ことでそのやっかいな事態が「自然に解決」されることを待つのである<sup>10</sup>。

伊沢が「突き放される」プロセスは、物語のラスト近くにおいて、極端な形で表現されている。

女の眠りこけているうちに女を置いて立去りたいとも思ったが、それすらも面倒くさくなっていた。人が物を捨てるには、たとえば紙屑を捨てるにも、捨てるだけの張合いと潔癖ぐらいはあるだろう。この女を捨てる張合いも潔癖も失われているだけだ。微塵の愛情もなかったし、未練もなかったが、捨てるだけの張合いもなかった。生きるための、明日の希望がないからだった。明日の日に、たとえば女の姿を捨てても、どこかの場所に何か希望があるのだろうか。何をたよりに生きるのだろうか。どこに住む家があるのだから、眠る穴ぼこがあるのだから、それすらも分りはしなかった。米軍が上陸し、天地にあらゆる破壊が起り、その戦争の破壊の巨大な愛情が、すべてを裁いてくれるだろう。考えることもなくなっていた。

(93-94)

花田氏は、この一節の最後の「考えることもなくなっていた」という一

文が、「文学のふるさと」において展開された安吾の思想の連続を示すものであるということを、次のように主張している。

「何事にまれ言葉が用意されているような」（「文学のふるさと」）伊沢が、もはや思考を放棄したというのである。白痴の女が「豚そのもの」だと知らされたからだけではない。むしろ、そう名づけて理解しようとする精神の営為自体の徒勞なることを、したたか一方で感じはじめているからにほかならない<sup>11</sup>。

つまりここにおいて、伊沢は「文学のふるさと」で描かれる、誠実な知識人そのものとなったのであり、そのような観点からすれば、戦前の安吾の思想と「白痴」とは連続していると、花田氏は解釈しているのである。

### 3 「断絶」の相

さて、前節で見たように、花田氏は「文学のふるさと」を手がかりとして、戦前から戦後への安吾の思想の連続性を主張すると同時に、他方で、「墮落論」と「白痴」との、一般的に論じられる緊密な結びつきを疑問とすることによって、「白痴」と「墮落論」以前の諸作品との間の「断絶」をも示唆している。

花田氏は、「白痴」を『墮落論』とそのまま相通ずる仕組みの小説（小田切秀雄）だとか、『墮落論』と表裏をなす小説（兵藤正之助）だとかする一般的な評価を承けた上で、次のように論じている<sup>12</sup>。

なるほどそのとおりに違ひなからうが、しかし「白痴」一篇のなかから、「墮落論」のあの「生きよ墮ちよ」という声高な太い旋律がそのまま響いてくるだろうか。やはり評論と小説との差だという理由ではかたづけられないがそこには見られる

……<sup>13</sup>。

このような観点を、花田氏は、「墮落論」の真意をつかむためには「白痴」その他の小説をカギとして読まなければならない、とする本多秋五の論を援用しつつ、次のように展開している。

本多は、「墮落論」を一瞥したかぎりでは理解しがたい安吾の「真意」、すなわち「生きよ墮ちよ」という結語の背後にある複雑で微妙な心理が、「白痴」のなかによく語られていると指摘する。つまり、「白痴」は「墮落論」の「生きよ墮ちよ」との主調音とではなくして、もつと別の何ものかとより緊密に連絡しているというのである<sup>14</sup>。

この「もつと別の何ものか」を、花田氏は戦時中の安吾の「発見」と「反省」に求めるのである。花田氏は、本稿の冒頭で引用した「墮落論」の一節を解釈し、「この『考えることを忘れ』た『一人の馬鹿で』しかなかった戦時下の人間の姿の発見と、そのような過去への反省の思い」こそが、「白痴」執筆の動機となったのではないかと、主張するのである<sup>15</sup>。

「墮落論」の「生きよ墮ちよ」という結語をささえているところの、戦時下の日本には「人間」がいなかったことの発見と反省という、いわば底流した認識と感情とこそが「白痴」に大きくかかわっていると考える。その認識と感情は「墮落論」においてはじめて語られたものであり、安吾にとっては戦争体験の意想外な収穫であったといえよう<sup>16</sup>。

このような「発見」と「反省」のゆえにこそ、言わば「観念の人」である伊沢の、観念を持たないたんなる肉体である白痴の女への嫌悪が強烈に描写されているのであり、このことについては、花田氏も本稿冒頭で挙げ

た「白痴」の一節を解釈しつつ、次のように指摘している。

いわゆる近代人たる伊沢も最初のうちは「俺にもこの白痴のような心、幼い、そして素直な心が何より必要だったのだ」などと分別らしく思っていたが、さて押入のなかで空襲におびえる白痴の女の「虚空をつかむその絶望の苦悶」の相を目のあたりにしては、このように激しく嫌悪せざるをえない。はては「俺は女を殺しはしない」が「戦争がたぶん女を殺すだろう」とひそかに「せせら笑」って「空襲をきわめて冷静に待ち構えてい」るまでに嫌悪の思いはつよくなってしまふのである<sup>17</sup>。

本稿の冒頭において、戦前の安吾が「肉体」あるいは「肉慾」といったものを、我々の「生」の根本を成すものであると主張し続けていたことを指摘した。白痴の女は、まさに「観念なき肉体そのもの」であり「肉慾の塊」として描かれているのであって、それが醜悪なものとして描かれている以上、ここに、安吾の思想の「断絶」が見られると考えざるを得ないであろう。

#### 4 「新たな相」への止揚

花田氏は、これまで見てきた「連続」と「断絶」の二つの相がいわば「止揚」される形で現れる「新しい相」を、「白痴」のラストに見出している。

夜が白んできたら、女を起して焼跡の方には見向きもせず、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場をめざして歩きだすことにしようと思っていた。電車や汽車は動くだろうか。停車場の周囲の枕木の垣根にもたれて休んでいるとき、今朝は果して空が晴れて、俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうか

と伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであった。(94)

花田氏は、この一節中の「停車場」を、安吾の「ふるさと」に相当するものであるとし、次のように論じている。

「なるべく遠い停車場をめざして歩きだす」という。「なるべく遠くまで自分の足で「歩き」たいと伊沢が願うのはすでに頷けるところだとして、ではなぜ「停車場」なのか。おそらく作者の漠然とイメージした「停車場」とは、いわば帰着点であると同時に出発点でもあるような場所、作者愛用の語彙にならっていえばくふるさと>と見なしてさしつかえないだろう。(中略)伊沢もまた、「停車場」を「ねぐら」にひととき憩い、しかるのち旅立とうとする。(中略)これを「墮落論」の垂直軸に即して言いかえるなら、<下降>から<上昇>へ転じる、そのいわば折り返し点が、すなわち「停車場」だということになる<sup>18</sup>。

また、「戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。(中略)人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ」という「墮落論」の一節を解釈しつつ、次のように論じている。

この「墮落論」の一節にそくしていえば、「人間」が「正しく墮ちる道を墮ちき」ろうとしながら、「自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだ」さざるをえなくなるという、その折り返し点こそが「停車場」にほかならない。したがって、その「停車場」は、「なるべく遠い」ほうが望ましい、ということになるのである<sup>19</sup>。

「自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみ

だ」さざるをえなくなる、とは、人は何がしかの「観念」をやがては構築してゆかざるを得なくなる、ということの意味するのであって、これは安吾の戦時中の「発見」と「反省」によってもたらされた断絶、あるいは新しい相なのである。つまり、「白痴」のラストにおいて、安吾の思想の連続と断絶が止揚された形で表現されていると、花田氏は解釈するのである。

「文学のふるさと」において人間存在の原点ともいうべき「ふるさと」の概念を確認した安吾は、つづく「日本文化私観」で「実質」ということの大切さを説いて「生き方を確立しようとしたのであり、戦後の「墮落論」で「生きよ墮ちよ」と説いた。その終始一貫した軌跡のうえに「白痴」を措える視点を基本的にくずすことは許されないにしても、戦後の安吾文学が「白痴」からひとつの静かな出発をとげていることもまた、けっして見過ごしてはならないのではないだろうか<sup>20</sup>。

花田氏はこの「止揚」の意義を、このように総括している。

## 5 結び

以上、花田氏の非常に示唆に富む論考を検討することによって、安吾の思想における「連続」と「断絶」の問題を見てきたわけであるが、論者としては、「白痴」の内在的解釈をめぐる、花田氏の解釈にいささか「違和感」をおぼえるざるを得ない。それは、花田氏の解釈が「白痴」を、知識人の「健全な」誕生のプロセスとするものである、さらに、こういった表現が許されれば、「楽観的な」プロセスとするものであるかのような印象を受けるからである。それはたとえば、花田氏の次のような文章から感じられるものである。

「人間」をめぐって伊沢はたえず白痴の女と対決せねばならぬ使命を無条件に持たされているかのようである。白痴の女に立ち向かうことによって伊沢は自らの内面を凝視し、軽薄なる知識人としての側面を削ぎ落とし、ついには白痴の女と対峙し超克せんとする存在にまで高められてゆくのである<sup>21</sup>。

伊沢がここで「女を起」そうとするのは、それが「ひとつの理想の女」（奥野健男）だったからでも、あるいは「明日に希望がないから」（神谷忠孝）でもなく、つまるところ「女」の存在自体が、彼にとっていわば不可知なものの、ひとまず「豚」とでもよぶほかない、わけのわからないものであったがゆえだろう。だからこそ、伊沢は何ら最終的な裁定を下すことなく、賛美も罵倒も切り捨ててもひかえ、あえて全的に白痴の女の存在をまるごと引き受ける。「途方もない混沌を、途方もない矛盾の玉を、グイとばかりに呑みほす」（「FARCE に就て」という、あの全的受容の強靱な精神を、ようやく伊沢がわがものとしたというわけだ<sup>22</sup>。

論者にはむしろ、「白痴」のラストが、伊沢の意志とは無関係に、つまり、「対峙し超克せん」とするのでもなく「あえて引き受ける」のでもなく、これからも絶えることなく伊沢を訪れるであろう「突き放される」体験を暗示した「救いのない」ものであるように感じられるのである。そしてむしろ、そのようなものとして「白痴」をとらえた方が、花田氏も援用している「文学のふるさと」における「むごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救いなのであります。モラルがないということ自体がモラルであると同じように、救いがないということ自体が救いがあります」（100）という安吾の思想との「連続」の相において「白痴」を解釈することにつながるのではないだろうか。

こういった点も含めて、論者自身による「白痴」の内在的解釈は別の機

会に改めて展開することにするが、ここでごく簡単にその方針を述べることをもって、本稿の結びとしたい。

「白痴」を内在的に解釈するにあたり、私は『悲劇の誕生』におけるニーチェの「悲劇」の概念を援用したい。「白痴」を、ニーチェが論じる悲劇の構造を手がかりに読むことが出来るのではないかと、私は考えるのである。もちろん、安吾の作品をただたんに文学の一ジャンルとしての悲劇「として」読むのだとすれば、それは戦前の安吾の思想と戦後のそれとの間に、ただ断絶を認めることにしかなるまい。というのは、先に挙げた花田氏による解釈の中でも引用されている「FARCEに就て」をはじめとした初期作品において、安吾は悲劇も含めたあらゆるジャンルと異質な文学の在り方としてのファルスの可能性を主張したのであり、また、小説執筆においてその可能性を実践していったのだからである。しかしながら、ニーチェの説く「悲劇」と安吾の説く「ファルス」とは、たんなる術語の相違を超えて結びつくものである。

ニーチェは悲劇を、「アポロ的なもの」と「ディオニュソス的なもの」という、対立しあうものの相剋によって展開されるものであると説く<sup>23</sup>。ごく簡単に表現してしまえば、ニーチェによれば、この世界の真の在り方はディオニュソス的なもの、あるいは混沌なのであるが、人間はそのようなものを直視することには耐えられない<sup>24</sup>。そこで人間は、混沌の中にアポロ的なもの、あるいは秩序を見出しあるいは作り出すことによって、混沌を隠蔽してそれを直視し続けることを避けるのである<sup>25</sup>。しかし、そのような秩序は、所詮は「仮象」あるいは「錯覚」にすぎないのであり、やがてこの世界の真の在り方である混沌によって破壊され、飲み込まれてしまい、人間は再び混沌を直視せざるを得なくなるのであって、人間はまたしても、秩序という仮象あるいは錯覚を求めざるをえない<sup>26</sup>。つまり、混沌の中から秩序が生まれるのであるが、その秩序は混沌によって破壊され飲み込まれてしまう、しかしまた、その混沌の中から新たな秩序が生まれる…。ニーチェによれば、このプロセスは無限に続くのであるが、それが世

界に対する人間の本来的なかわり方なのであって、このプロセスを作品として表現したものが演劇としての真の悲劇なのである<sup>27</sup>。

伊沢もまた芸術家なのであって、観念においてアポロ的なものあるいは秩序を構築し続け、求め続けた。それに対して、伊沢の勤務先、場末の町、そしてたんなる肉体としての白痴の女は、伊沢の観念を打ち砕き続けるという意味でディオニュソス的なものなのであり、混沌なのであった。さらには、そういったものすべての大前提として、戦争という巨大なディオニュソス的なものあるいは混沌があったのであり、物心両面におよぶアポロ的なものの徹底的な破壊への予感が、あたかも基調低音のように「白痴」の全体を貫いているのである。

さて安吾は、初期のエッセイである「茶番に寄せて」において、道化について次のように論じているのであるが、ここで論じられる道化とはファルスと言い換えることも出来る。

正しい道化は人間の存在自体が孕んでいる不合理や矛盾の肯定からはじまる。(中略) そのような不合理自体を、合理化しきれないゆえに、肯定し、丸呑みし、笑いという豪華な魔術によって、有耶無耶のうちにそっくり昇天させようというのである。合理の世界が散々もてあまたした不合理を、もはや精根つきはたので、突然不合理のまま丸呑みにして、笑いとばして了おうというわけである<sup>28</sup>。

ここで「不合理」だとか「矛盾」だとか言われているものは、まさにディオニュソス的なものにほかならないのであって、道化あるいはファルスとはそういったディオニュソス的なものをあえて肯定するものなのである。「道化の本来は合理精神の休息だ」<sup>29</sup>、つまり、アポロ的なものを打ち砕くディオニュソス的なものを肯定することは一時の休息にすぎないのであって、合理精神は再びアポロ的なものを構築し、あるいは求めてゆかなければならないのである。だが、新たなアポロ的なものの仮象あるいは錯覚

も、再びディオニュソス的なものに打ち砕かれる、つまり、「戦い敗れた合理精神」は「完全に不合理を肯定」せざるを得なくなる。「途方もない混沌を、途方もない矛盾の玉を、グイとばかりに呑みほす」とは、まさにこのような事態なのである。そして、必ずしもそこに「笑い」があるとは限らない。もしも必ずそこに笑いがあるのだとしてしまえば、それはたんなる予定調和の主張なのであって、安吾の意図していたことではあるまい<sup>30</sup>。詳しくは機会を改めて論じることにするが、安吾は戦争体験によって、そのような予定調和が成り立たないということを実感したのであろう。つまり、「思想に肉体」が宿ったのであり、観念が肉体と結びついたのである（「デカダン文学論」）<sup>31</sup>。

---

安吾のテキストからの引用に際しては『桜の森の満開の下・白痴 他十二編』（岩波文庫、2008年）の頁数をカッコ内に示した。

#### 参考文献等

- 千葉宣一「坂口安吾『白痴』」（『国文学 解釈と鑑賞』第35号 1970年12月 至文堂 pp.120-121）  
土岐恒二「喜劇と部分的真実—『白痴』の文体について」（『国文学 解釈と教材の研究』第24号 1979年12月 學燈社 pp.15-20）  
花田俊典「『白痴』の位置—戦後安吾文学の出発」（『文芸と思想』第45号 1981年1月 福岡女子大学文学部 pp.19-30）  
同「『白痴』評釈」（『坂口安吾研究講座 II』1985年 三弥井選書 pp.43-60）  
水上勲「『白痴』論」（『国文学 解釈と鑑賞』第58号 1993年2月 至文堂 pp.108-111）  
松本常彦「『白痴』論の前に」（『国文学 解釈と鑑賞』第71号 2006年11月 至文堂 pp.103-108）

<sup>1</sup> 花田氏「評釈」47

<sup>2</sup> 同上 48

<sup>3</sup> 同上 49

<sup>4</sup> 同上

- 
- 5 同上 64  
6 同上 50  
7 同上 50  
8 同上 51  
9 同上  
10 同上 52  
11 同上 54  
12 「位置」20  
13 同上  
14 同上 20 傍点論者  
15 同上 26  
16 同上 30  
17 同上 26  
18 評釈 57-58  
19 「位置」29  
20 同上 30  
21 同上 28 傍点論者  
22 花田氏「位置」57 傍点論者  
23 Friedrich Nietzsche, *Die Geburt der Tragödie ; Unzeitgemäße Betrachtungen I-III (1872-1874)*, Berlin : Walter de Gruyter, 1972. (西尾幹二訳『悲劇の誕生』、中公文庫、1974年)。21 (西尾訳 7 以下、カッコ内の数字は西尾訳の頁数を示すものとする)、37-38 (30-31)、65-67 (76)、78 (94)、99-100 (128-129)、132-133 (179-180)、135-136 (184-186)、150-151 (209-210) 等を参照されたい。  
24 31-33 (23-24)、35-36 (29-30) 等を参照されたい。  
25 61 (69) 等を参照されたい。  
26 105 (137-138)、145-148 (202) 等を参照されたい。  
27 11 (223)、133 (181-182)、149 (207) 等を参照されたい。  
28 『墮落論・日本文化私観 他二十二編』(岩波文庫、2008年)、78-79 傍点論者  
29 同上 79 傍点論者  
30 『悲劇の誕生』においてニーチェは、エウリピデスおよびソクラテスの登場とともに悲劇の墮落が始まったのだと主張するのであるが、その際に悲劇の結末にいわゆるデウス・エクス・マキナ(機械仕掛けの神)が導入され、悲劇が予定調和において完結するようになってしまったことを指摘している。82 (102)、91 (155)、110 (145)、111 (146) 等を参照されたい。  
31 『墮落論・日本文化私観 他二十二編』268